

日本サーバス 50 周年誌を発行して早や 1 年

2013 年 7 月 7 日

A. T.

(日本サーバス名誉会長)

早いもので日本サーバス 50 周年誌を発行して、丁度丸 1 年が経過しました。昨年 (2012 年) 7 月 7 日 “七夕の日” 発行です。50 周年の 2012 年 9 月、記念日の 2 ヶ月前でよいタイミングでした。この機会に、この上下 2 巻 730 頁の大著が生まれるまでの歴史を振り返ってみたいと思います。

<計画から誕生まで>

日本サーバス 50 周年誌を企画するに当たって、解決しなければならない基本的な難題がいくつもあって、それら乗り越えなければ、大まかな編集方針の枠組みを考えることさえ出来なかった。まあ動き出せば何とかなるさ、兎に角提案することが第一だとの思いで、私は 2007 年の第 29 回国内会議に 50 周年誌出版計画を提案した。25 周年誌が 1988 年 1 月に原多印刷から出版されているので、50 周年誌を出すのは当然とのコンセンサスを先ずは会員の間で共有するためである。これは 1 年の考慮期間において次年度に再討議しようと翌年に持ち越され、2008 年の第 30 回国内会議で 50 周年誌出版決定、編集委員 5 名が選任され、総編集長に私、編集担当責任者に I 前会長が委嘱された。出版費用の積立開始もすぐ始めたいと提案したが、全体像もまだ決まっていないこの段階では時期尚早となった。

記念誌の出版は 50 周年の年、すなわち 2012 年の 9 月 (会の発足日) かその前後の 2012 年中、遅れてもその翌年の前半と一応目標がつけられたが、編集委員会の最初の仕事は編集方式の大まかな策定のための基本的な枠組みを構想することだった。第一に必要な予算額ほどの程度か、第二は編集委員会の構成、役割分担と各支部との密接な協力体制の構築、そして第三は収集する資料範囲の特定。私の胸算用では本出版の代金は、本のボリュームのイメージさえない中での予算策定は困難で見当もつかないが、最低 100 万円以上は絶対必要、100 万円以上の額をできるだけ押さえ、圧縮することが不可避だということだった。その他は準備を進めていく中で逐次具体化すればよいと思っていた。

何れにせよ積立金は早期からこつこつ積み上げていくことが必要だったが、私の期待より 2 年遅れの 2009 年から、それも僅か 10 万円から始まった。2010 年からは 20 万円に増額してもらったが、本部特別会計に蓄積されたのは、結局出版年 2012 年で僅か 60 万円にすぎなかった。

2008 年 7 月に編集本部の記念誌編集大枠案がまとまり、2009 年 3 月の国内会議に提出する編集案の作成が開始された。

2009 年 3 月、第 31 回国内会議で現況報告、以後全国からの資料収集が活発化、資料は過去に会報に掲載され蓄積された莫大な体験記と活動報告、それに 50 周年誌のために全会員に募集した手記である。2010 年 1 月、メールによる全国準備会議、2010 年 3 月の第 32 回国内会議では開催直前の朝 2 時間の全国準備会議で各支部と意見を交換、資料収集の本格化と収集資料様式の統一化を図った。そしていよいよ編集担当責任者 I さんのところに全国から集中的に送付され集積された資料と総編集長の私が所持する資料を一緒にして、その総点検と項目別の選別作業を進める

作業とその分担方針を決めることになった。同年の夏である。私の構想では、Iさんが編集担当責任者として実務の中心に座り、私は総編集長としそれに色々意見を出すと言う二人が二人三脚(助手はMさん)で2012年までの2年間、製本代節約の工夫をしながら本格的な編集に没頭する。Iさんもこの構想に賛成だった。心を一つにしたチームができれば前途は明るい。そう確信した。

ところが思いもかけないことが、その会合日の直前の金曜日起こった。Iさんの急死は、よりもよってこれからは記念誌作りの本番という私との第1回本格打ち合わせ直前の2010年8月20日。私はかけがえのないパートナーを失ってお先真っ暗、呆然自失の状態になった。

気を取り直すのにどれ位かかったか、記憶は定かではないが、いつの間にか、総編集長であった私はさらにIさんの役目もそっくり引き継ぎ、編集の実務全体を両肩に背負って難局に立ち向かっていくことになってしまった。印刷費用節約は常に頭の中にあっただので、私の秘書のIさん(愛称アキちゃん)をタイプ打ちに動員し、私のところに集まる原稿、私が作る原稿の殆んど全てを印刷向きに彼女が打ち直した。2010年の第4四半期、2011年の殆んど全部、そして発行日に先だつ2012年の前半の合計約2年間、私は兎に角本の編集に没頭した(とはいってもこの2年間、私はずっと月刊専門誌「発明」の毎月連載を担当していたので、それもしっかりと書けたのは自分でも不思議である)。実は、本の編集は一人でしてはいけないとの信念を持つ私を応援して、本部役員でServas Japan Host List(毎年発行)の当初からの担当者であるT.M.さんが終りの1年間程、編集委員になって私と一緒に仕事をしてくれて、それは本当にありがたかったし、また大変な助けともなった。製本に際しては安価なCD-Romを作ってはどうかとの意見も入れて両方合わせて400部発行にした。選んだのは大阪の日報印刷で、予算が60万円しかないことを告げ、且つ原稿はそのまま印刷するだけでよいように仕上げたことを強調し、この予算に合意するよう迫った(印刷会社社長はこれを認めてくれ、少なくともここまで完成した原稿を用意するには100万円は使っただろうと賞賛してくれた)。60万円は即金払い、10万円は払えるようになった時払いと支払い総額が決まり、予算と本を贈与した友人の寄付金、それと会員配布の本代の一部に一寸食い込んだ程度に収めることができホッとした次第である。

<編集方針に関連したエピソード>

1. トラベラー、ホスト体験記

サーバス活動は、国際親善に直接密接に関連したヒューマニティを基本とする民間国際活動そのものである。トラベラーとなつての未知の国々での心躍る経験も、ホストとして自宅に家族の一員として受け入れる経験も、心と心が通じ合い友情が生まれれば、その素晴らしい体験には甲乙つけ難いものがある。それらの体験が文章になり世の中へ出版されれば読者となる他人にも筆者の心温まる体験の心意気と喜びが伝わり、とても興味深い読み物となる。できるだけ多くの体験記をできるだけ多くのサーバス会員に書いてもらい、それを会員には勿論会員外の人々にも広く読んでいただきたい。そして筆者ご本人にもいつかまた自分の体験記を読み返すときを持って欲しい。

そんな思いで、現会員の皆さんは勿論全員、旧会員の出来るだけ多くの方々にも寄稿していただき、また過去の本部、各支部会報に掲載された報告文も数多く掲載しようと一生懸命収集に努めた。お陰様で上巻410頁、下巻320頁、計730頁の中の半分以上400頁を会員のトラベラー、ホスト体験記に当てるといふ盛況振りが浮彫りになったのだが、支部によって

レポート件数に若干の偏りがあったように感じた。例えば東北、近畿、九州支部は件数で盛況、関東、東海北陸、中国四国支部は件数で若干低調（もっと多くてよかった）のようで、これは実情の正確な反映よりも投稿者の熱心さの程度が反映したのだろう。

2. 英語記事

25周年誌を出版したとき、「残念ながらこの記念誌が日本語であるため、海外の人々に読んでいただくことは困難です」と書いた。この事は私の念頭にずっとあったので、50周年誌を編集するときはこの点を改善し、是非英語のコーナーを充実させたいと考え、編集委員5名の中に長くアメリカで大学教授を務め、最近帰国されたTさん（当時は関東支部長から第5代日本サーバス会長）に英文に関わる記事の専任として入っていただいた。既にかんりの資料を集めておられたが、残念ながら母親看病に専念するために活動できないとして突然退任され、この計画は消滅、実現できなかった。

3. サーバスの基本的活動方針についての真剣な討論

毎年一回開催する国内会議ではサーバスのあるべき姿に関し真剣な討議が繰り返されている。それらの歴史は今日のサーバスの規則が何故このようになったのかの理由を教えてくれる大切な遺産であり、その意味で大事な記録である。50周年誌にはその部分をできるだけ抽出し、正確に既述するように努めた。その主なものを列記すると下記の通り（50周年誌第5部に主として集中掲載）：

- ・ NPO法による日本サーバスの法人化
1999年に討議、2000年に「将来の法人化を視野に入れ組織の整備を進める」と決定
- ・ 日本サーバス会則の作成
1999年に提案され、2000年に会則成立、4月1日より施行、若干の改正を経て今日に至る
- ・ トラベラー認定基準の厳格化（1982年から問題表面化）
トラベラーになるためにのみ入会し、帰国後ホストになる約束を無視する会員の発生を防ぐ対策の必要性が論議され今日の2種類の会員制へと変更された
- ・ トラベラー受入れの問題点
（例）事前連絡なしに来訪した場合（毎年のように討議の議題にのぼっている）
- ・ 国内会議の議事録
どれ程詳しく記載するのがよいか（必要な程度の詳細さをどこにおくか）
- ・ サーバス国際会議に出席する日本代表の旅費負担額
会の負担分が全額か半額か、或いは一部かを規則で明確にすべし

4. 50周年誌の価値

50周年誌は日本サーバス発展の歴史と足跡を正確に記録したというその意味でまず何物にも代え難い会員の宝である。人間の記憶そのものがいかに曖昧で主観的なもの、そして人それぞれによっていかに大きな記憶の差があるものなのかに気づかされ、驚くことが間々ある。そんなとき50周年誌が如何に役立つか、その役割は大きい。

しかし、50周年誌の本当の何物にも代え難い価値は、日本サーバスが社会の中で国際親善に如何に貴重でユニークな役割を果し続けてきたか、また将来も果たし続けていくかといった会活動の本筋を客観的、組織的、総合的にまとまった形で分かり易く総括して示したこと

にある。

50周年誌はそれを読んだ人を感動させ勇気付ける。海外の人達との交流のこんな楽しい道があることを目覚めさせる。コミュニティの国際的交流には、こうした素晴らしいNPO組織もあるのかと驚きを与える。この50周年誌を国際親善に興味を持つ人達、生の英語にもっと接したいと思っている人達には是非広く提供し、入会者を増やしたい。会員はもちろん、1冊(又はCD1枚)ずつ所有して時々パラパラとめくって眺めて欲しいし、新入会員には必ず1冊(1枚)ずつ配って欲しい。

今回の国内会議で、日本サーバスのNPO加入申請を進めることに決まったが、この50周年誌はその申請時、日本サーバスをまとまって紹介する貴重な資料になることは間違いない。

私は50周年誌を一部の友人の人達に配ったが、その中に韓国に特別の関心をずっと以前から強く持ち続け、頻繁に日本と韓国との間を往来している女性がいる。彼女がこの50周年誌、その中でも特に韓国を特集した一章の読後感を私に寄せて下さった。それを原文のまま添付して、私のこの小文の末尾を飾らせていただきたい。

A 先生

まずは日本サーバス 50 周年及び記念誌「一つ屋根の下での国際交流」の完成、心よりお祝い申し上げます。大変遅くなりましたが、つたない感想文を、お約束ですので、恥ずかしながらお送りしたいと思います。

A 先生がお書きになられていらっしゃるように 50 年前は今とは全く違う時代であり、その時代の国際交流には大変なご苦勞があったかと思えます。韓国などはまだ軍事政権の時代でした。その時代から A 先生は既に国際交流に目を向けられ、日本サーバスを発足されたこと、まさにその当時、時代の先端であったと拝察いたします。

記念誌は韓国との交流の 40 ページほどを読ませていただきました。皆様ご自分の言葉で感動を表現され、また、様々な都市のことが書かれていて、ほとんどソウルにしか行かない私には勉強になりました。行ってみたいといつも思いつついけない・・・百済の首都であった扶余、慶州などみなさん韓国でもいろいろな都市にいかれているのですね。

「韓国は本当に人が温かい国です」という文章に大変共感致しました。That's Korea は色々ありますが、これも私の考える That's Korea の一つです。私は国際交流の団体に今まで所属したこともございませんし、今後も団体に所属することはないと思えますが、これからも自分なりに韓国と韓国の方々との交流を深めていきたいと思えます。ここ何年の韓流ブームの影響もあり日韓の間は本当に近くなり、韓国の情報がたくさん日本でも手に入るようになりました。けれども情報が入るようになったからこそ誤解も起こりやすく、また、誤って伝えられる情報も多くなります。そのような中でこれからも自分なりに韓国との交流を深めて、また、日本に韓国の魅力を紹介しつつ、自分なりに韓国の情報を発信し続けていきたいと思えます。出来ましたら、日韓の細やかな架け橋となっていきたいと思えます。

クリスマス、年末年始をソウルで過ごし、今回も元気をもらって帰ってきました。ここまで惹かれる理由は何かをこれからも探し続けていきたいと思っております。

2013 年は朴槿恵大統領が誕生します。初の女性大統領です！ご両親が暗殺されて青瓦台にお一人で戻られる朴槿恵大統領のお気持ちは私には想像することすらできません。けれども、ソウルでは新しい時代が来るとの国民の期待も大きなものです。今年も韓国から目が離せません。

2013 年 1 月

K. H.